

## 巻頭言

# English Plus のアメリカ文学

名古屋大学 国際教育交流センター長

長 畑 明 利

この4月に国際教育交流センター長を拝命した。専門はアメリカ文学であり、これまでは国際言語文化研究科で、現在は人文学研究科・文学部で、アメリカ文学を教えている。

アメリカ文学はとりわけ第二次大戦後に多くの作品が和訳され、日本でも数多くの読者に読まれてきた。また、明治以来、日本における英語学習は英米の文学作品を読むことと不可分の関係にあり、アメリカ文学の諸作品はイギリス文学の作品同様、英語の教科書・参考書として用いられてきた。ホーソーン、トウェイン、ジェイムズ、ヘミングウェイ、フォークナー、スタインベック、サリンジャー、マラマッド、オコナー、カーヴァーといった作家の短編作品が、大学1、2年生向けの注釈付き語学教科書として、あるいは副読本として用いられ、日本の大学生の多くが語学学習を通じてアメリカの文学に触れることになった。

英語の教材として用いられたことが示唆するように、アメリカ文学は一般に英語で書かれた文学として了解されている。しかし実は、アメリカの文学は英語で書かれたものばかりではない。時代、地域により差はあるものの、アメリカは歴史を通じて多言語状況にあった国であり、英語だけが話される国ではなかった。そしてそれゆえ、アメリカの文学も常に英語のみの文学として了解されてきたわけではない。現在アメリカの出版社から出版されているアメリカ文学史やアンソロジーは、ほぼ例外なく英語作品のみを紹介もしくは収録しているが、かつては必ずしもそうではなかった。たとえば、1917~21年出版のケンブリッジ版アメリカ文学史 (*The Cambridge History of American Literature*) では、アメリカ国民の言語は英語であると述べつつも、「英語以外の言語で書かれたもの」というセクションがあり、ドイツ語、フランス語、イディッシュ語、アメリカ先住民の言語で書かれた作品が紹介されている。またその他の箇所にも、英語以外の言語で書かれた作品への言及がある。また1946年に出版され、戦後のアメ

リカ文学研究・教育の現場で権威的地位を得た、E・スピラー編になる合衆国文学史 (*Literary History of the United States*) にも、「インディアン遺産」と題されたセクションや、「言語の混交」というセクションがある。

アメリカの文学に英語以外の言語による作品が含まれること、またその事実が目されてきたことは、アメリカという国が移民の国であり、多民族国家であることと関わりがあることは言うまでもない。移民第一世代の母語は通例出身国の言語であり、また移民が形成したコミュニティで英語以外の母国が維持され、複数言語状況の下で作家活動に従事するケースもある。一方、アメリカへ来る前から複数言語使用者であった作家が英語と母語のそれぞれの言語で作品を残す場合もある。

ハーヴァード大学のワーナー・ソラーズ教授は、アメリカ文学におけるこうした多言語状況を示しつつ、英語単一言語主義の態度と、英語を中心としつつも、英語以外の言語にも注目し、それを学ぶ態度とを区別し、前者を English Only、後者を English Plus と呼んでいる。彼は2000年に同僚とともに多言語によるアメリカ文学のアンソロジー (*The Multilingual Anthology of American Literature*) を出版し、そこには先住民の諸言語、イタリア語、アラビア語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ポーランド語、ロシア語、イディッシュ語、スウェーデン語、ノルウェー語、ヘブライ語、デンマーク語、中国語、ハンガリー語、ギリシャ語などで書かれたテキストがその英訳とともに収録されている。

昨年の大統領選挙以来顕在化したアメリカ第一主義、移民・難民排斥主義を前に、English Plus の方針は旗色が悪いようにも思われるが、母語以外の言語に注目し、それを学ぼうとする姿勢から学ぶことは多い。国民文学の中に存在する英語以外の言語の作品に目を向けることは、海外の文学や外国語への関心をも喚起するに違いない。母語の世界に閉じこもりがちなの日本の学生諸君にも伝えたいことの一つである。